

不定詞疑問文とゾ・カ・ヤラ  
—— 中世以降のゾの脱落を中心に ——

竹村 明日香 (お茶の水女子大学)

takemura.asuka@ocha.ac.jp

## 1. 問題の所在

中世日本語のWH疑問文(以下、不定詞疑問文<sup>1</sup>)は、〈問い〉〈疑い〉〈反語〉という発話行為の異なるにより、表現形式が次の(1)のように異なる(柳田1985)。中でも〈問い〉は文末助詞ゾを置く形式が広く用いられている(2)。

- (1) a. 〈問い〉 疑問詞……ゾ  
b. 〈疑い〉 疑問詞……カ 疑問詞……ゾ。  
c. 〈反語〉 疑問詞(…) カ…ゾ。 疑問詞……ゾ。(柳田1985:128-129頁より抜粋)
- (2) 「蠅めはどこに居るぞ (doconi voruzo)」と言へば (『天草版伊曾保物語』484頁)

しかし〈問い〉の文末助詞「ゾ」は、中世末期から近世にかけて脱落する例が増加する。

- (3) 客人一「各何と思しめす、[…]
- (4) 賀「いやそちは、今はどちへいた
- (『虎明本狂言集』「くじざい人」中、49)
- (『虎明本狂言集』「こひ賀」上、369)

これらのゾの脱落は、体言述語文(例:せんちんは何ぢや)の方から先に生じており、ゾから助動詞「チャ」へと交替が進んだことが指摘されている(外山1957)。しかし、用言述語文のゾの脱落に関しては様々な解釈があり(小林1996、矢島1997、紙谷2000)、未だ統一した見解はない。

そこで本発表では、従来注目されてこなかった発話行為とゾの脱落の関連性に着目して分析を行い、以下の2点を指摘する。

- ① 〈問い〉の形式であっても聞き手への問いかけ性が弱い疑問文ほどゾを脱落させやすい。  
② ゾを脱落させた不定詞疑問文は、現代語でのノダ文にならない不定詞疑問文にほぼ相当する。

以下、2では先行研究を概観し、ゾの脱落する不定詞疑問文と、現代語のノダ文にならない疑問文に共通点があることを示す。3では中世～近世資料の調査結果を示し、4では問いかけ性の弱い疑問文とゾを脱落させる不定詞疑問文に関連性があることを示す。5はまとめである。

## 2. 先行研究

### 2.1 不定詞疑問文におけるゾの脱落<sup>2</sup>

▼ 外山(1987):二類ある終助詞ゾのうち、第二類のゾが先に消滅、続いて第一類ゾも脱落した。

ただし「是はいかなこと」は慣用表現のためゾが脱落したとしており、脱落要因に一貫性がない。

<sup>1</sup> 先行研究における「疑問語疑問文」「WH疑問文」「要説明の疑問表現」の用語も、本発表では「不定詞疑問文」に統一して用いている。引用論文中のこれらの用語も適宜「不定詞疑問文」に置き換えている。

<sup>2</sup> 下記の論考の他に、待遇表現なども考慮に入れて考察した矢島(1997)、近世資料も広く考察した紙谷(2000)などもあるが省略する。

- (5) a. 第一類 相手へのもちかけ (陳述) の働きを持つ。  
 (例) して清盛の嫡子をば何と言うたぞ (天草平家、巻一)
- b. 第二類 指定判断 (叙述) と相手へのもちかけ (陳述) の働きとを持つ。  
 (例) いつの間に変りはてた御心ぞ (天草平家、巻三) (外山 1987 : 39)

▼小林 (1996) : 大蔵虎光本狂言集 (1817 年書写) の脱落例を、文型 A~F に分類して考察。

【脱落が多い】

- (6) 「不定詞+チャ」、「不定詞+(体言)+断定チャ」  
 (例) 「何者ぢや」(朝比奈)、「[...] 何とする物ぢや」(節分)
- (7) 「<何をするんだ!> という感動詞的な用法になると、『ゾ』を伴わないことが普通」(p. 272)  
 (例) シテ「何とする 太郎」是が目近で御座ル シテ「何とする (目近)
- (8) 「独白形で自問する用法」、「反語表現」はゾを用いないことが多い。(p. 277)  
 (例) 遙々間に (問にハ) 戻られまひが何と致ふ (自問) (末広がり)  
 はて肝をつぶさいで何とせふ。 (反語) (骨河)

【脱落しない】

- (9) 「相手に直接問いかける場面では、積極的に『ゾ』を使用していることがわかる。」(p. 272)  
 「[...] 相手の見解を求める場合には、相手に対してもちかける気持ちが特に強く現れやすく、『ゾ』を必要とする度合いが強まるのであろう。」(p. 277)  
 (例) 「何事で御座ルぞ」(末広がり)

以上から、ゾの脱落は (6) 「不定詞+チャ」、(7) 詰問調の問いかけ、(8) 自問・反語に多いことが窺える。これらの特徴は、現代語でのノダ文 (ノカ) にならない不定詞疑問文と重なるところがある。

## 2.2 ノダ文にならない不定詞疑問文——現代語——

▼田野村 (1990) : ノダの意味特性は「承前性」、「既定性」、「披瀝性<sup>3</sup>」、「特立性」。

- (10) ①ノカにならない疑問文 : 「既定性」による制約が働く。(p. 55)  
 ⇒まだ決まっていない (=既定でない) ことを尋ねる時はノダが現れない。
- a. 聞き手に考慮の上での返答を求める時  
 株で一儲けする気は {ないか / ?ないのか} ね?
- b. 相談を持ちかける時  
 きょうはどこへ {行く / 行くの?} ?
- c. 勧誘や依頼  
 あなたも一緒に行って {みませんか / ?みないんですか} ?
- d. 背後の事情を尋ねない時  
 おい、けさの新聞 {見たか / ?見たのか} ?
- e. 不特定多数に尋ねる時  
 確定申告はもうすまされましたか?

- (11) ②ノダにならない疑問文 : 「披瀝性」による制約が働く。  
 ⇒初めから回答が容易・解答が明らかなもの (=披瀝性がない) にはノダは用いない。

<sup>3</sup> ノダの披瀝性とは、「話し手、もしくは、ほかの誰かが、披瀝という行為を行うという意味では必ずしもない」(田野村 1990 : 14、注 4) 「「のダ」を含む文においては、披瀝されなければすべての者には知りたいようなことがらが問題とされるということである。」(同上)

<sup>4</sup> 「今日はどこへ行くの?」というノダ文は、相手が既にどこかへ行くことを決めている (既定性) ことを前提にした上で、行き先を尋ねている文である。

- a. 相手が容易に答えを出せる時 今日が {何曜日ですか/?何曜日なんですか} ?  
 b. 反語 そんな残酷なことが私の口から {言えますか/?言えるんですか} ?

▼野田 (1995) (1997) : スコープのノダ

- (12) 「～は [疑問語] ですか」 「差出人は誰ですか？」 疑問語がフォーカスになるのでノダ不要。  
 (13) その場での判断を問う 「これありますか？」  
 (14) クイズ型 「(クイズで) 次のオリンピックは、どこで開催されますか。」  
 (15) 詰問調 「何故黙ってた？」  
 (16) 反語 「話してもみないで、なぜわかる？」

⇒反対に「なぜ」「どうして」を用いる不定詞疑問文はノダが必須 (野田 1995 : 215)

▼金水 (2012) : 話し手が命題に疑念を持っている場合、疑念の焦点を示すため卓立焦点構文 (ノダ文) を用いる。金水 (2013) : 話し手の疑念と無関係な構文では、ノダ (ノカ) が不要。

- (17) 反語・詰問: なぜもっと早く起きない。  
 (18) 申し出・依頼: 窓を開けましょうか?  
 (19) 業務的疑問文: (タクシー) どちらにいらっしゃいますか? (寿司屋) 何から握りましょう。  
 (20) クイズ・ゲーム: (カードを取らせて) なぜそのカードを取りましたか?

まとめると、以下がおおよそノダ文にならない不定詞疑問文のバリエーションである。(21a-c) に中世日本語でゾの脱落が見られることを考えると、(21d) 以下にも脱落が生じている可能性がある。

- (21) a. 「～は [不定詞] か？」 これは何ですか?  
 b. 反語 だれがあんな奴を助けるか。  
 c. 詰問 なぜ病院に行かなかった。  
 d. 勧誘・依頼・申し出 いくら支払いましょうか?  
 e. 不特定多数に尋ねる (観客に) このメンバーの中で誰が好きですか?  
 f. その場での判断を問う 『坊っちゃん』はどこにありますか?  
 g. クイズ型 カンザス州はアメリカのどこにありますか?

また、先行研究では「質問文」を中心に分類しているが、現実では、聞き手からの解答 (情報提供) を求めようとしない聞き返し (22) や応答 (23) に相当するような不定詞疑問文でもノダは現れない。

- (22) 「実は借金があるんだ」「今、なんて言った？」  
 (23) 見知らぬ人から 「おい」「何か用 (ですか)」

こうしたノダの現れない不定詞疑問文のバリエーションが、ゾの脱落する不定詞疑問文と関係あるのかどうか、以下、中世～近世期資料を中心に検討する。

### 3. 調査資料と調査方法

#### 3.1 調査資料

中世: 古活字本『毛詩抄』(全20巻、龍谷大学蔵本)、『虎明本狂言集』(大名狂言類～万集類)  
 近世: 近松世話物浄瑠璃集 (10作品、作品名は稿末記載)

### 3.2 調査結果

#### 3.2.1 中世：毛詩抄

【表1】毛詩抄の不定詞疑問文

形式	用例数 (%)
不定詞一ゾ	549 (71.9)
不定詞一φ※	49 (6.4)
不定詞ゾ	47 (6.2)
不定詞カーゾ	52 (6.8)
不定詞カーφ	33 (4.3)
不定詞一ヤラ	31 (4.1)
不定詞一カ	1 (0.1)
不定詞ゾーヤ	1 (0.1)
不定詞カーカ	—
不定詞ゾーカ	—
合計	764 (99.9)

※「不定詞φ」（誰ぢや）も含む

【表2】不定詞一φの文末

形式	用例数 (%)
一ウ・ウズ	25 (51.0)
連体形終止	11 (22.0)
体言	7 (14.3)
一チャ	4 (8.2)
その他 (マイなど)	2 (4.1)
合計	49 (100)

【表1】の通り、「不定詞一ゾ」が不定詞疑問文の大半を占める。

従属節でも (25)、自問 (26) においても、ゾを用いた形式が用いられている。

(24) なぜに鄰国と連属して合力はせぬぞ。 (巻二、188)

(25) 何事を作たぞなれば、幽公を刺て作たぞ。 (巻七、142)

(26) 我は辛勞をするが、さていつかへらうぞ。 (巻四、319-20)

「不定詞一φ」は全体の1割に満たないが、【表2】の通り、文末にモダリティの「ウ」「ウズ」が来る例が半数 (51.0%) を占める。これらには「～と思ふ」が後接しやすいことから、心中での〈自問〉を表すものに「不定詞一φ」が用いられやすかったと考えられる。

(27) 幽王は何とせうと思はるゝぞ。 (巻一二、117)

(28) 母のいられたらば、いかに悦喜せられうずらうと思ふ程に、悠々と思ができたぞ。 (巻六、137)

(29) 我何たる時に生て、生じやうが悪て、此うきめにはあうらうと云心ぞ。 (巻一二、119)

連体形終止が文末となる例は、間接疑問文や、心中の〈疑い〉を示す例など様々であり、取り立てて特徴は見いだせない。

(30) 魯公をつかみ殺いて、誰が殺たとも知ぬと云て、軍中からだいたと云ぞ。 (巻二十、391)

(31) 旅立と思ふ者が、打立て行はせいで、道の程がいか程あると、道の遠近をはかるぞ。

(巻一二、104)

全体として、「不定詞一ゾ」が優勢であるが、「ウ」「ウズ」のモダリティ形式を取るような、〈自問〉の例にはゾの脱落例が偏る傾向にあることが確認できる。

#### 3.2.2 中世末期：虎明本狂言集

【表3】虎明本狂言集

形式	用例数 (%)
不定詞一ゾ。	780 (65.2)
不定詞一φ。	167 (14.0)
不定詞ゾ。	142 (11.9)
不定詞一ヤラ (ン)	33 (2.8)
不定詞ゾーカ	24 (2.0)
不定詞カーφ	24 (2.0)
不定詞一カ	17 (1.4)
不定詞ゾー。	5 (0.4)
不定詞カーゾ。	4 (0.4)
不定詞カーカ。	1 (—)
総数	1197 (100)

※「不定詞φ」（誰ぢや）も含む

「不定詞一ゾ」が優勢であるが、『毛詩抄』と比べると「不定詞一φ」が微増している (6.4%→14.0%)。

「不定詞一φ」の発話行為の分類には、2.2 の先行研究ほか、仁田1991を参照し、以下の通り行った。

**問いかけ：**聞き手が存在し、話し手が聞き手に疑問点 (不定詞) の解答 (情報提供) を求める。

**反語：**疑問表現の形式だが、話し手の判断を主張し、それへの確認・同意を含む。

**詰問：**喧嘩の場などで、話し手が一方的に相手を問い詰める。

呼びかけへの応答：名前などの呼びかけに対する応答をする。

(例) 山伏「なふ太郎 太郎」「何事ござる

聞き返し：相手の発話が理解できないことを、疑問表現で聞き返す。

(例) 仲人「しかとさやうにきひたが 賀」「何事をいします

【表 4】 虎明本「不定詞—φ」の内訳

解答	発話行為	用例数(%)
要	問いかけ	53 (31.8)
不要 (98)	反語	27 (16.2)
	自問	23 (13.8)
	詰問 (叱責)	17 (10.2)
	呼びかけへの応答	11 (6.6)
	間接疑問文	8 (4.8)
	聞き返し	7 (4.2)
	勧誘・申し出	5 (3.0)
引用	引用	11 (6.6)
	その他 (和歌など)	5 (3.0)
	総数	167 (100)

「不定詞—φ」を発話行為ごとに分けたのが【表 4】である。

分類でみると、〈問いかけ〉が3割と最も多い。

そのうち体言が述語にくる例は、53 例中 15 例 (28%) あり、  
外山 (1987) が指摘した通り体言述語文でのゾの脱落が目立つ。

(32) 船頭「せんちゃんは何ぢや (薩摩のかみ、中、314)

(33) 「鰻頭を見て」大名「何といふ物じや (まんぢう、上、300)

(34) 主「いや汝は夜半ばかりの自分に、あつはといふたが、  
何事であつた (くらままいり、中、66)

しかし、「聞き手からの解答 (情報提供) を求めるかどうか」という観点でそれぞれの発話行為をみると、解答を求める〈問いかけ〉53 例よりも、求めない〈反語〉等 98 例の方が多く注目される。

〈反語〉〈自問〉〈詰問〉〈呼びかけへの応答〉はそれぞれ「不定詞—φ」の1割程度あり、いずれも、聞き手は存在するものの不定詞に対する解答を要求していない。

(35) 〈反語〉

- 何某「やい、いつもうばが所へ、としとる物をやるに、なぜにやらなんだ、いそひでやれ (よねいち、下、98)
- 後家「わらはがやうな者を、たがそひませう、そのうへいきたうもござらぬ (時、下、223)

(36) 〈自問〉

- 大名「言語道断めんぼくうしなふた、きやつが心中はづかしひよ、なにとしてよからふな (しうくがらかさ、上、210)
- 次郎冠者「[...] せがれの時からひとつに御ほうこう申て有に、せいばいをめされたらは、何とせう、まつあれへまいつて太郎くわじやに申きかせふ、[...] (よびこゑ、上、319)

(37) 〈詰問〉

- 妻「やいわ男、花ごがなんといふた、なふはらたちやな、[...] (はなご、中、216)
- 羯鼓売「某がとうきて有に、何とてそれにいる、そちへのけ (なべやつばち、上、128)

(38) 〈呼びかけへの応答〉

- 孫一「なふきかしますか 孫二「何事でおじやる (やくすい、上、110)
- 告げ手「[...] 申ござるか 女「何事でおじやる (ひげやぐら、中、274)

多くはないが、〈聞き返し〉や〈勧誘・申し出〉の例も確認できる（40c は不特定多数への呼びかけ）

(39) 〈聞き返し〉

仲人「しかときやうにきひたが 賀「何事をいはします」（こひ賀、上、371）

(40) 〈勧誘・申し出〉

a. 参詣人二「何をかけにあそばさう」（やるこ、下、95）

b. 太郎冠者「それならば百疋でかひませう、代物はどこで渡し申さう

（すゑひろがり、上、71）

c. 客人一「各何と思しめず、あれが思ひよつた事があらふ程に、いはせてきかせられひ

（くじざい人、中、49）

上記の例は、聞き手から不定詞に対する解答（情報提供）を求めておらず、問いかけ性が弱いということが指摘できる。反対に、話し手が、聞き手の把握している解答を得たい場合には、問いかけ性が強く、「不定詞一ゾ」が用いられる。

(41) 越前「おそ<sup>き</sup>うし<sup>き</sup>ゃはどこもとで御ざるぞ 加賀「つつとおくに御ざる」（餅酒、上、44）

(42) 大名「[…] 此は何と申川にて御ざるぞ 入間「此川はいるま川と申」（入間川、上、162）

以上から、ゾの脱落する例は、聞き手からの解答を求めない、現代語でノダ文にならない不定詞疑問文との重なりがあることが窺える。

### 3.2.3 近世：近松世話物浄瑠璃

【表5】近松世話物浄瑠璃

形式	用例数 (%)
不定詞一φ※	173 (59.4)
不定詞一ゾ	49 (16.9)
不定詞ゾ	31 (10.7)
不定詞一ヤラ	22 (7.6)
不定詞ゾ一カ	6 (2.1)
不定詞カ一φ	6 (2.1)
不定詞一カ	2 (0.7)
不定詞カ一ゾ	2 (0.7)
不定詞カ一カ	— (0)
合計	291 (100)

※「なう死ぬる身に何の望み [ガアロウカ]」（宵庚申、460）のように省略による体言止め23例は除外した。

【表6】「不定詞一φ」内訳

解答	発話行為	用例 (%)
要	問いかけ[〜はAぢや]	79 [26] (45.7)
不要 (90)	反語	36 (20.8)
	自問	24 (13.9)
	詰問 (叱責)	18 (10.4)
	疑念表出	10 (5.8)
	間接疑問文	1 (0.6)
	勧誘・申し出	1 (0.6)
	呼びかけへの応答	—
	聞き返し	—
	引用	—
	その他	4 (2.3)
	合計	173 (100)

【表5】の通り、「不定詞一φ」が「不定詞一ゾ」を上回り、半数を超えるようになる。

「不定詞一φ」の内訳は【表6】の通り、〈問いかけ〉の例が最も多い。その約32%（26例）は「（〜は）不定詞ぢや」という不定詞を述語にとる形式である。

(43) a. やい三太そりや何ぢや。（重井筒、67）

b. 北の町からいかつげに来るは誰ぢや。ヤア、中の島の八右衛門。(冥途の飛脚、165)

c. なんと房様サアどうぢや。どうぢやと詰めかけられ。(重井筒、77)

(44) 〈反語〉

今の治兵衛が四つ三貫匁の才覚。打ちみしやいでもどこから出る。(天網島、374)

(45) 〈自問〉

こっちは京の方あの山は闇か。但し比叡山かどこへ行たらば逃れうと。眼も迷ひうろたへ

(油地獄、398)

(46) 〈詰問 (叱責)〉

大だはけめそれを誰が吟味する。サア来い裏町を尋ねて見ん。(天網島、381)

ハテ軽口の段かいのそれ程にない事をさへ私にはなぜにいはんせぬ。(曾根崎、22)

近世期資料の「不定詞一〇」は、虎明本狂言集と同じく〈反語〉〈自問〉〈詰問〉の順に用例が多いが、近世には、〈疑念表出〉(仁田 1991)に相当する例が複数現れる。

▼**参考** 〈疑念表出〉(仁田 1991)

「なんだ?! 故障か!?」(シ・日本)

(47) 出来した事態を十分に把握できていない、といった事態そのものへの疑念を表した文 (p. 146)

(48) 〈疑念表出〉は、〈疑いの文〉と同様、問いかけ性を必要としていない。(同上)

(49) 〈疑念表出〉

a. <sup>〔徳兵衛〕</sup>おぬしが捺した判が有る。[…]<sup>〔九平次〕</sup>ム、ウ何ぢや判とはどれ見たい。(曾根崎、25)

b. <sup>〔女郎〕</sup>(※与兵衛様は)是から直に曾根崎へ叶はぬ用とてござりんした。<sup>〔森右衛門〕</sup>何ぢや曾根崎へ。

南無三宝遅かった。(油地獄、423)

こうした例とは反対に、聞き手から解答を要求する場合には「不定詞一ゾ」が使用される。

(50) <sup>〔お乳人〕</sup>して年はいくつ名は何といふぞ。<sup>〔三吉〕</sup>年は今年十一。[…]名は自然生の三吉(丹波、96)

(51) こなさんどう思うてぞ。ム、其の覚悟極ればもう落付いた(丹波、118)

(52) […]やい文六。おのれ若年なれども […]何として源右衛門を疾くに討っては捨てざるぞ。

いや我等も承り。家来どもに申付け彼が旅宿へ討手に遣し候へば。(堀川波鼓、56)

以上の通り、近世においても、聞き手への問いかけ性が弱く、解答(情報提供)を要求しない不定詞疑問文ほどゾの脱落が多く、反対に、聞き手からの解答を求める問いかけ性の強い不定詞疑問文はゾを脱落させにくいという対照的な様相が見られる。

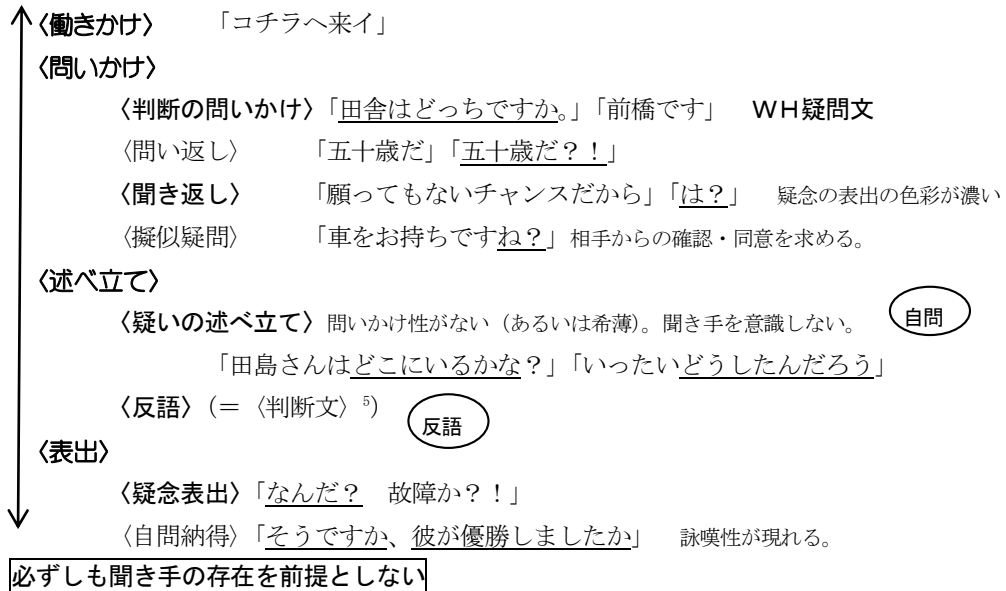
#### 4. 〈問い〉と〈疑い〉

〈問い〉と〈疑い〉の異なりについて整理をする。多くのモダリティ研究では、〈問いかけ〉から聞き手を想定した問いかけ性が欠落・希薄化すると〈疑い〉になることが指摘されている。また問いかけ性の欠落は、表現形式により異なりがあることも示されている。

#### 4.1 仁田 (1991)

疑問表現の諸タイプを、〈発話・伝達の実態〉の中に位置付ける。典型的な疑問表現を〈判断の問いかけ〉とし、問いかけ性が欠落・希薄化するほど、〈述べ立て〉〈表出〉に傾くとする。

(53) **積極的に聞き手の存在を前提とする**



(54) 〈判断の問いかけ〉とは：

- (a) 話し手に不明な点があって、判断の成立を断ずることができない。【疑い】
- (b) 聞き手がいて、話し手の不明な点を解決する情報を提供することができる。<sup>6</sup>
- (c) 話し手が聞き手に不明な点を解決するための情報提供を求める。【問いかけ】

(仁田 1991 : 137)

#### 4.2 安達 (2002)

(55) 〈質問〉：不確定性条件 (判断の未成立) + 問いかけ性条件 (聞き手に対する働きかけ)

〈疑い〉：不確定性条件のみ。

(56) 〈疑い〉の文とは、「何らかの意味で話し手にとって不明な情報があるにも関わらず、聞き手に問いかけることによってそれを解消しようとする志向をもたない文」(p. 184)

(57) 〈疑い〉の文の対話的用法——質問用法・応答用法

質問用法：〈応答を強制しない質問〉……相手が解答を知っていれば与えてほしい。

「[…] どうして岳がお金を盗ったなんて断言できるんだろう。」(『岳物語』、p. 46)

<sup>5</sup> ただし、「反語表現の含む判断の主張、確認・同意の要求は、常に、一定、絶対であるというのではなく、様々な状況・文脈といった語用論的な条件のあり方によって、微妙に変化するものである。」(p.150)とあり、〈述べ立て〉から疑問表現の形式を取った〈働きかけ〉まで幅があるとする。

<sup>6</sup> (52b)は問いかけの言語行為が成功するための条件。クイズ式疑問文では、必ずしも(52b)を前提としていない(p.137)

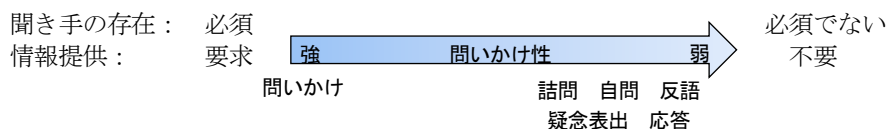


### 4.3 ゾを脱落させる不定詞疑問文

#### 4.3.1 問いかけ性と関連

前述の通り、ゾの脱落は、〈問い〉の形式はとっていても問いかけ性の弱い表現形式を中心に生じていた<sup>7</sup>。ゾは、先行研究の指摘にもある通り、相手へのもっかの働きを持つ（外山 1987、小林 1994 他）、問いかけ性の強い助詞である。それゆえ、話し手の主張や疑念の表出を行う〈反語〉〈自問〉〈詰問〉〈問い返し〉などの問いかけ性の弱い表現形式では、不明な点を解決するための情報提供を求めないため、いち早くゾが脱落したものと考えられる。

【図 1】



また、ゾを脱落させる不定詞疑問文が、現代語のノダ文にならない疑問文と重なるのは、ノダにいわゆる「説明」を行う機能（寺村 1984、田野村 1990 他）があることと関連すると考えられる。

ノダの質問文は「話し手が見たこと聞いたことに対する聞き手の説明を求めるのに用いられる」（久野 1973、田野村 1990 も同様）。即ち、ノダは、ゾと同じく聞き手からの情報提供を求める問いかけ性の強い表現形式であるが故に、中近世期と同じく〈反語〉〈自問〉〈詰問〉などの問いかけ性の弱い表現形式からは脱落するものと推定される。

以上からすると、不定詞疑問文の文末助詞ゾは、現代語のノカに等しい機能（＝聞き手から説明を求める問いかけ性の強い働き）を持っていたと考えられる。

#### 4.3.2 近世の理由を求める疑問文におけるゾの脱落

補足として、近世ではなぜ理由を求める不定詞疑問文にゾの脱落が多いかを説明する。野田（1995：215）は、現代語の「なぜ」「どうして」を伴う不定詞疑問文ではノダが必須であると指摘しているが、近世資料では、そのノダに相当するゾの脱落が目立つ。

(58) a. 小春を踏む足で。うろたへたおのれが根性をなぜ踏まぬ。（天網島、366）

b. 二人の子供が目をさまし。大事の母様なぜ連れて行く祖父様め。（天網島、378）

しかし、「なぜ」「どうして」を伴う不定詞疑問文は、約半数（26 例中 15 例）が、末尾に打消表現を伴う形であり、「なぜ～しないのか」という〈詰問〉になっている。また、打消にならない例もほとんどが〈反語〉の例であり、話し手の主張を強調する表現形式になっている。

(59) a. 左様なことをせんよりもおのれが額に傾城の娘と。なぜ看板は打ちをらぬと齒切を。してぞ泣きけるが（五十年、141）

b. 男を立てる其方と見て詮方なう渡す金。さっぱりと請取って母の心を安めてたも。包は解くに及ぶまじいらうて見ても五十両。どうしてたもる<sup>8</sup>と差出す（冥途の飛脚、167-168）

打消表現を取ることで、相手がしなかったこと（理由）を一方向的に責める形となっている。理由

<sup>7</sup> 前述の通り、不定詞を述語にとる「～は [不定詞] ちや」も中世末期から一定数存在する。これらは不定詞が疑問のスコープになることからゾ（＝ノダ）を脱落させたものと考えられ、問いかけ性の有無とは無関係であると考えられる。

<sup>8</sup> 脚注 35 「どうして下さるの意から転じて、これで文句があるかの意に用いる。」（p.167）とある。

を尋ねるのではなく、相手への非難を一方的に押しつける表現であるために、ゾが脱落しているものと考えられる。

## 5. まとめ

本発表では以下のことを述べた。

- (A) 中世末期以降、「不定詞ーゾ」という不定詞疑問文ではゾが脱落するようになる。それらは、現代日本語でのノダ文にならない不定詞疑問文にほぼ相当する。
- (B) ズの脱落は、〈反語〉〈自問〉〈詰問〉など、聞き手への問いかけ性の弱いものから脱落している。ズは、聞き手からの情報提供を求める問いかけ性の強い助詞であるため、問いかけ性を要しないこれらの表現からいち早く脱落していったものと考えられる。
- (C) 現代語のノダを伴う疑問文は、聞き手からの説明を求める場合に用いられる。中世のズも、聞き手からの情報提供を求める助詞であるが故に、ズやノダが脱落する疑問表現には共通点があると考えられる。

### 【参考文献】

- 安達太郎 (2002) 「第5章 質問と疑い」 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版
- 紙谷栄治 (2000) 「中世における疑問表現について」『国文学』80
- 金水敏 (2012) 「疑問文のスコープと助詞「か」「の」」『国語と国文学』89-11
- (2013) 「日本語疑問文研究の課題」 第一回「日本語疑問文の通時的・対照玄言語学的研究」 研究発表会発表レジュメ
- 久野暉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店
- 小林賢次 (1996) 「大蔵虎光狂言集における疑問詞疑問文——終助詞「ゾ」を中心に——」 平山輝男 博士米寿記念会編『日本語研究諸領域の視点下巻』明治書院
- 小林千草 (1994) 『中世のことばと資料』武蔵野書院
- 田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法——「のだ」の意味と用法——』和泉書院
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版
- 野田春美 (1995) 「～ノカ?、～ノ?、～カ?、～φ?——質問文の文末の形——」 宮島達夫・新田義雄編『日本語類義表現の文法(上) 単文編』くろしお出版
- (1997) 『「の(だ)の機能」』くろしお出版
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃 (2002) 『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版
- 矢島正浩 (1997) 「疑問詞疑問文における終助詞ゾの脱落——近世前・中期の狂言台本を資料として——」 加藤正信編『日本語の歴史地理構造』明治書院
- 柳田征司 (1985) 『室町時代の国語』東京堂出版

### 【調査資料】

- 毛詩抄：清原宣賢講述、倉石武四郎・小川環樹校訂 (1996) 『毛詩抄 詩経』全四巻、岩波書店
- 虎明本狂言集：池田廣司・北原保雄 (1972-1983) 『大蔵虎明本狂言集の研究 本文篇』上中下巻、表現社
- 近松世話物浄瑠璃：重友毅校注 (1958) 『近松浄瑠璃上』(日本古典文学大系 49) 岩波書店より  
曾根崎心中、堀川波鼓、重井筒、丹波與作待夜の小屋筋、五十年忌歌念仏、冥途の飛脚、大経師昔暦、心中天の網島、女殺油地獄、心中宵庚申、以上 10 作品。